



Title	未来共生社会と国際協力新時代
Author(s)	澤村, 信英
Citation	未来共生学. 2014, 1, p. 390-393
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51757
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

未来共生社会と国際協力新時代

澤村 信英

大阪大学大学院人間科学研究科教授

国際協力には30年以上にわたり関わってきたが、「共生」という言葉にはあまり馴染みがなかった。国際協力の世界では、支援者と被支援者の関係性は、はっきりしている。支援者は、潤沢な資金、知識、技術を持ち、それが不足する被支援者に提供するのが従来の方法であり、今も大きくは変わらない。特にキリスト教の精神を基盤に持つ欧米の人々は、日本よりも慈善的な感覚で援助を行う傾向にある。したがって、日本の援助のように自助努力に対する支援、すなわち自立的な活動を側面支援しようとする考え方は、国際的には理解されにくい。

研究者の場合、困難な状況にある人々を研究の対象とすることは少なくない。そういう場合、頭はドライであっても、心は揺れ動くことがしばしばある。多少の支援は個人的にできても、直接的な利益を得るのは、研究者側である。それでも現地の人々は、研究者の来訪を歓迎し、調査に対して便宜を図ってくれる。おそらく、何度も行き来することにより、一定の信頼関係が構築されるからであろう。

人の縁というのは不思議なものである。多くの研究者は、さまざまな偶然から将来を通して付き合うことになるフィールドに出会う。私の場合、それがケニアなのかもしれない。アフリカの教育に関心があったとはいえ、ケニアを最初に訪問した時、何か大きな研究目的を持っていたわけではない。しかしそれ以来、研究をさせてもら

いながら、現地の人々からは人生そのものを学ばせてもらったと思っている。

これまでアフリカばかりに出張していた私であるが、これから書く内容は、トルコに逃れてきたシリア難民の人々が運営する学校での調査経験に基づいている。シリアとの関わりは、ケニアとの出会い以上に三つの偶然が重なっている。まず、ケニアでNGO活動をしていた卒業生が、ちょうど任期満了したところで別のNGOに移り、この時期が日本でシリア難民への支援が本格化した頃で、教育支援を行うことになった。次に、ある大学院生がシリアの教育に関心があり研究のフィールドを探しているところであった。最後に、この未来共生イノベーター博士課程プログラムに私自身が関わり始めたことである。

普段行き慣れた国に行くのも楽しいが、誰かに連れられて行く国において思いもよらぬ経験をすることができる幸運もある。それが私にとっては、シリア難民が運営する学校およびその教師、関係者との出会いであった。最初に訪問した2013年3月、週末に喫茶店でC校長と会うと、スマートフォンを使って学校の動画を見せてくれた。彼ら自身が支援者の写真を撮影し、自校のFacebookページにアップして謝意を表することをごく普通に行っていた。学校を運営する資金は、そのようなソーシャル・メディアを通じた支援者との出会いにより得ている部分が大きいという。まさに、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)が機能していることに感動した。ここで重要なことは、主体的に動いているのは、被支援者だということである。そもそも、「被支援者」という、支援者側の論理で相手を見ること自体がかなり失礼なことなのだろう。

C校長が経営する学校は、2013年12月現在、3校までに増え、教職員数172人、生徒数3750人になっている。彼は日本の教育に関心があるという。その時は、日本人に対する外交辞令なのだと感じていた。日本の子どもたちの行儀のよさは、イスラム圏で定評があるようで、映像をあれこれと見せてくれる。例えば、靴をきっち

りと靴箱に入れたり、並べたりするものである。モスクでは大人でもそんなことはできないという。来日したいという意向が相手から示されることは、国際協力の世界では良くあることである。この場合、旅費などすべてをこちらで負担することが大前提である。今回のC校長の場合、そのような費用負担の話はなく、ビザを取るための書類（招聘状と身元保証書）を作成してほしいとのことであった。最後まで半信半疑であったが、その校長が本当に来日することになった。関西空港に実際に到着した時は、感慨深いものがあった。さらに、日本滞在中、事あるごとに感謝され、そのようなことはこれまでの国際協力の経験の中でほとんどなく、そういう文化でもあるのかと思っていた。しかし、しばらく付き合う中で気づかされたことは、彼らにとって必要なのは、資金ではなく、人間的なつながりだということである。国際協力といえば、資金や知識、技術ばかりに目が向けられるが、その背後では常に人と人のつながりが存在するのである。前面で起こっている国際協力に気を取られていると、そのような関係性は見えなくなってしまう。そういう人のつながりをつくる点では、大学という空間は絶好の場所である。

私がJICA職員として働いていたのは、もう20年近く前のことであるが、当時のJICAのキャッチフレーズは「人づくり、国づくり、心のふれあい」であった。技術協力の実施機関として「心のふれあい」を大切にしてきた。ところが、援助の効果や効率的実施が強く求められる昨今、このような人間的なつながりを強調できるような雰囲気ではなくなった。国際的な援助協調が進む一方、日本経済も停滞し、国際協力の予算が削減される中、そのような情緒的なことを前面に出せなくなったこともある。

国際協力において、資金や知識を介して、表面的な人のつながりは増えている。しかし、それをきっかけとして、「心のふれあい」にまで到達しているかといえば、まったく自信がない。人と人のつながりを逆にそれらが阻害しているようにさえ思える。このC校長との出会いは、抽象的な表現であるが、私の心を豊かにしてくれた。

未来共生社会とは、人間同士のつながりが豊かになることが基礎にあるのだろう。国際協力新時代は、支援者、被支援者の関係性を越えて、私たちの心の中ですでに始まっており、そこでは共感と連帯、そして他者に対する敬意(Respect)が基盤にあるように思える。